夜釣

泉鏡花

青空文庫

これは、大工、大勝のおかみさんから聞いた話である。

牛込築土前の、此の大勝棟梁のうちへ出入りをする、一寸使へる、岩次と云つて、女房持、小児の二人あるのが居た。飲む、買ふ、搏つ、道楽は少もないが、たゞ性来の釣好きであつた。またそれだけに釣がうまい。素人にはむづかしいといふ、鰻釣の糸捌きは中でも得意で、一晩出掛けると、湿地で蚯蚓を穿るほど一かゞりにあげて来る。

「棟梁、二百目が三ぼんだ。」

大勝の台所口へのらりと投込むなぞは珍しくなかつた。

が、女房は、まだ若いのに、後生願ひで、おそろしく岩さんの殺生を気にして居た。

霜月の末頃である。一晩、陽気違ひの生暖い風が吹いて、むつと雲が蒸して、火鉢の傍だと半纏は脱ぎたいまでに、悪汗が浸むやうな、其暮方だつた。岩さんが仕事場から——行願寺内にあつた、——路次うらの長屋へ帰つて来ると、何か、ものにそゝられたやうに、頻に気の急く様子で、いつもの銭湯にも行かず、ざく〳〵〳〵と茶漬で済まして、一寸友だちの許へ、と云つて家を出た。

留守には風が吹募る。戸障子ががた〳〵鳴る。引窓がばた〳〵と暗い口を開く。空模様は、その癖、星が晃々して、澄切つて居ながら、風は尋常ならず乱れて、時々むく〳〵と古綿を積

んだ灰色の雲が湧上がる。とぽつりと降る。降るかと思ふと、颯と又暴びた風で吹払ふ。

次第に夜が更けるに従つて、何時か真暗に凄くなつた。

女房は、幾度も戸口へ立つた。路地を、行願寺の門の外までも出て、通の前後を瞰した。人通りも、もうなくなる。……釣には行つても、めつたにあけた事のない男だから、余計に気に懸けて帰りを待つのに。——小児たちが、また悪く暖いので寝苦しいか、変に二人とも寝そびれて、踏脱ぐ、泣き出す、着せかける、賺す。で、女房は一夜まんじりともせず、烏の声を聞いたさうである。

然まで案ずる事はあるまい。交際のありがちな稼業の事、途中で友だちに誘はれて、新宿あたりへぐれたのだ、と然う思へば済むのであるから。

言ふまでもなく、宵のうちは、いつもの釣りだと察して居た。内から棹なんぞ……鈎も糸も忍ばしては出なかつたが——それは女房が頻に殺生を留める処から、つい面倒さに、近所の車屋、床屋などに預けて置いて、そこから内證で支度して、道具を持つて出掛ける事も、女房が薄々知つて居たのである。

処が、一夜あけて、昼に成つても帰らない。不断そんなしだらでない岩さんだけに、女房は人一倍心配し出した。

さあ、気に成ると心配は胸へ滝の落ちるやうで、——帯引占めて夫の……といふ急き心で、昨夜待ち明した寝みだれ髪を、黄楊の鬢櫛で掻き上げながら、その大勝のうちはもとより、慌

だしく、方々心当りを探し廻つた。が、何処にも居ないし、誰も知らぬ。

やがて日の暮るまで尋ねあぐんで、——夜あかしの茶飯あんかけの出る時刻——神楽坂下、あの牛込見附で、顔馴染だつた茶飯屋に聞くと、其処で……覚束ないながら一寸心当りが着いたのである。

「岩さんは、……然うですね、——昨夜十二時頃でもございましたらうか、一人で来なすつて——とう〳〵降り出しやがつた。こいつは大降りに成らなけりやいゝがツて、空を見ながら、おかはりをなすつたけ。ポツリ〳〵降つたばかり。すぐに降りやんだものですから、可塩梅だ、と然う云つてね、また、お前さん、すた〳〵駆出して行きなすつたよ。……へい、えゝ、お一人。——他にや其の時お友達は誰も居ずさ。——変に陰気で不気味な晩でございました。ちやうど来なすつた時、目白の九つを聞きましたが、いつもの八つごろほど寂莫して、びゆう〳〵風ばかりさ、おかみさん。」

せめても、此だけを心遣りに、女房は、小児たちに、まだ晩の御飯にもしなかつたので、阪を駆け上がるやうにして、急いで行願寺内へ帰ると、路次口に、四つになる女の児と、五つの男の児と、廂合の星の影に立つて居た。

顔を見るなり、女房が、

「父さんは帰つたかい。」

と笑顔して、いそ〳〵して、優しく云つた。——何が什うしても、「帰つた。」と言はせる

やうにして聞いたのである。

不可い。……

「うゝん、帰りやしない。」

「帰らないわ。」

と女の児が拗ねでもしたやうに言つた。

男の児が袖を引いて

「父さんは帰らないけれどね、いつものね、鰻が居るんだよ。」

「えゝ、え。」

「大きな長い、お鰻よ。」

「こんなだぜ、おつかあ。」

「あれ、およし、魚尺は取るもんぢやない——何処にさ……そして?」

と云ふ、胸の滝は切れ、唾が乾いた。

「台所の手桶に居る。」

「誰が持つて来たの、——魚屋さん?……え、坊や。」

「うゝん、誰だか知らない。手桶の中に充満になつて、のたくつてるから、それだから、遁げると不可いから蓋をしたんだ。」

「あの、二人で石をのつけたの、……お石塔のやうな。」

「何だねえ、まあ、お前たちは……」

と叱る女房の声は震へた。

「行つてお見よ。」

「お見なちやいよ。」

「あゝ、見るから、見るからね、さあ一所においで。」

「私たちは、父さんを待つてるよ。」

「出て見まちよう。」

と手を引合つて、もつれるやうに、ばら〳〵〳〵＼寺の門へ駈けながら、卵塔場を、灯の夜の影に揃つて、かあいゝ顔で振返つて、

「おつかあ、鰻を見ても触つちや不可いよ。」

「触るとなくなりますよ。」

と云ひすてに走つて出た。

女房は暗がりの路次に足を引れ、穴へ掴込まれるやうに、頸から、肩から、ちり毛もと、ぞッと氷るばかり寒くなつた。

あかりのついた、お附合の隣の窓から、岩さんの安否を聞かうとしでもしたのであらう。格子をあけた婦があつたが、何にも女房には聞こえない。……

肩を固く、足がふるへて、その左側の家の水口へ。……

……行くと、腰障子の、すぐ中で、ばちや〳〵、ばちやり、ばちや〳〵と音がする。……手もしびれたか、きゆつと軌む……水口を開けると、茶の間も、框も、だゝつ広く、大きな穴を四角に並べて陰気である。引窓に射す、何の影か、薄あかりに一目見ると、唇がひツつゝた。……何うして小児の手で、と疑ふばかり、大きな沢庵石が手桶の上に、づしんと乗つて、あだ黒く、一つくびれて、ぼうと浮いて、可厭なものゝ形に見えた。

くわッと逆上せて、小腕に引ずり退けると、水を刎ねて、ばちや〳〵と鳴つた。

もの音もきこえない。

蓋を向うへはづすと、水も溢れるまで、手桶の中に輪をぬめらせた、鰻が一條、唯一條であつた。のろ〳〵と畝つて、尖つた頭を恁うあげて、女房の蒼白い顔を熟と視た。——と言ふのである。

◇

山東京伝が小説を書く時には、寝る事も食事をする事も忘れて熱心に書き続けたものだが、新しい小説の構造が頭に浮んでくると、真夜中にでも飛び起きて机に向つた。

そして興が深くなつて行くと、便所へ行く間も惜しいので、便器を机の傍に置いてゐたといふ事である。

青空文庫情報

底本：「集成　日本の釣り文学　第九巻　釣り話　魚話」作品社
　　1996（平成8）年10月10日第1刷発行
底本の親本：「サンデー毎日」毎日新聞社
　　1924（大正13）年10月発行
初出：「新小説」春陽堂
　　1911（明治44）年
※初出時の表題は、「鰻」です。
※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2006年11月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/